

浄

monthly
JODO

土



1999

11



November

法然上人鑽仰会

テレコムしよう。



コミュニケーションの未来へ

日本テレコム

お申し込み、お問い合わせは
お客様センターへどうぞ



0088-82 (無料)

[受付時間] 9:00~23:00 (年中無休)

インターネットホームページ <http://www.japan-telecom.co.jp/service/>

国際電話は**0041**、市外電話は**0088**でテレコムしよう。

蓮勝寺

横浜・菊名

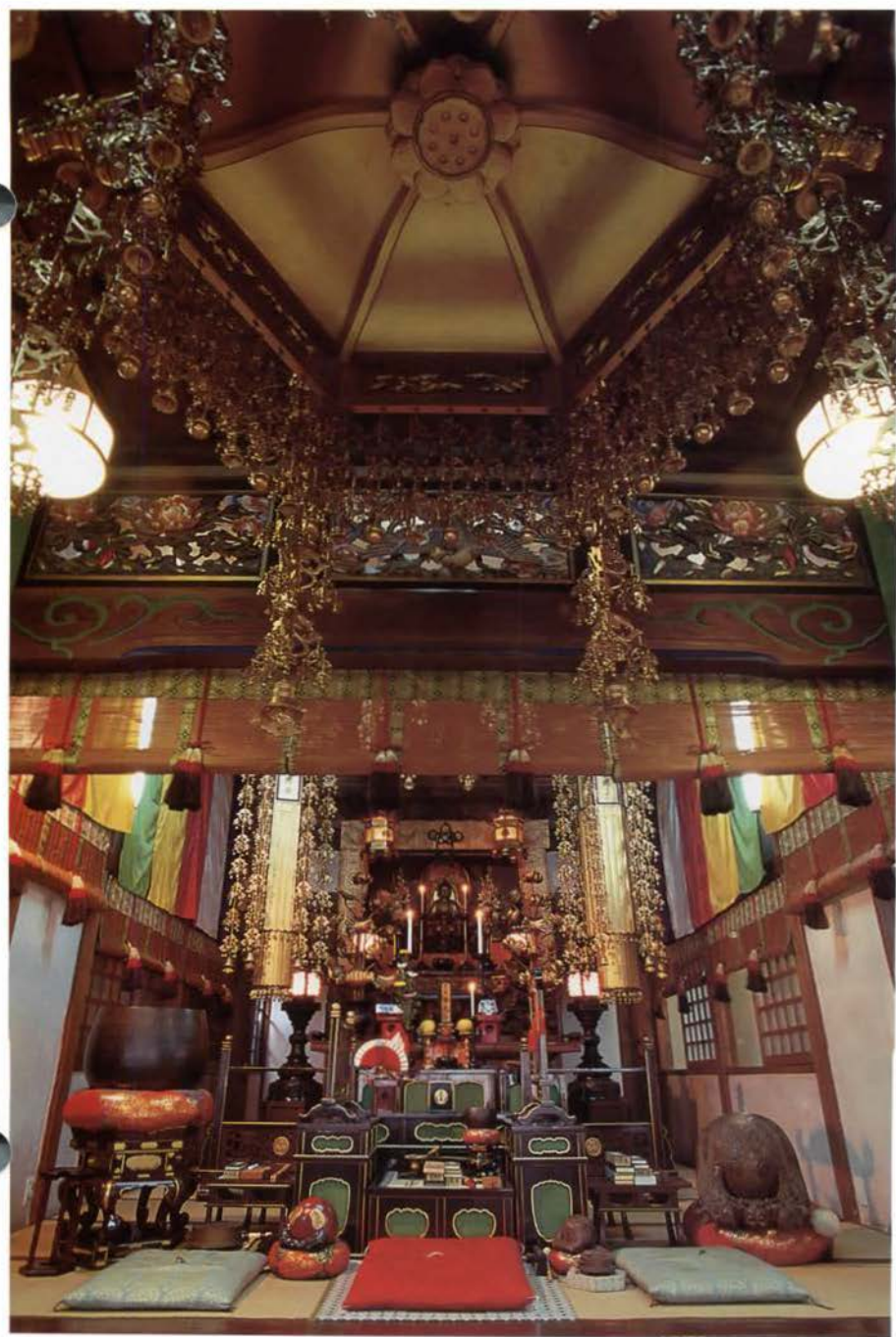
寺院紀行

寺に歴史あり。
人々に信仰あり。
日本の、心の故郷を紀行する。



柴田哲彦住職と文彦副住職。下は蓮勝寺本堂





開山蓮勝上人の木像



客殿奥の庭。二代目の伽羅と開山上人をイメージした石が配されている

横浜・菊名
蓮勝寺

この秋に落慶した客殿庫裡



新客殿内に移築した開山上人の庵室



開創年の正和四（一三一五）年の
銘刻の入った板碑



開山上人お手植えの伽藍。
平成六年に枯れたが樹齢はおよそ七百年



サッカースタジアムとして有名な
横浜国際競技場もすぐ近く



浄土

1999/11月号 目次

運をつかめ	塚原光男	8
寺院紀行「蓮勝寺」	真山 剛	18
表紙の言葉	三浦功大	27
連載小説 法然上人をめぐる人々 (七)	石丸晶子	28
コラム仏教歳時記		35
列伝 第1回佐藤賢順上人について	峰島旭雄	36
御法語に聞く	小村正孝	40
新連載つば庭日記	近藤啞々砂	44
Jフォーラム		49
浄土誌上句会	選者=増田河郎子	50
編集後記		54



表紙題字=浄土門主 中村康隆猥下

表紙撮影=三浦功大

アートディレクション=近藤十四郎

協力=迦陵頻伽舎

運をつかめ

オリンピック
金メダルへの
険しい道

オリンピック金メダリスト

塚原光男

体操競技というある意味で特殊なスポーツをやっています。人からサーカスとか軽業師とか、人間ではない、よくあんなばかなことができるねと言われ続けて、三十二年目になります。現役として二十二年、後半コーチと選手がダブッている時期もありますので、コーチが二十五年になります。オリンピックには、メキシコ、ミュンヘン、モントリオールと三回代表として出場させて頂きました。

みなさん「体操日本」という言葉を御存じでしょうか、三十代後半からの方だとどなたでも知っていると思います。四十年前、一九六〇年にローマオリンピックがありましてここで日本の男子体操が初優勝をして以来、一九六四年の東京オリンピック、一九六八年のメキシコオリンピックと三連勝し、このメキシコオリンピックから私が日本代表として参加することになりました、更に一九七二年ミュンヘンオリンピックで四連勝、さらに一九七六年のモントリオールオリンピックで五連勝を果たしました。何と二十年間世界一を守った大変な実績があり、「体操日本」という言葉が生まれたのです。この記録はいまだに破られておりません。二十年間世界に君臨したという記録は、体操界ばかりでなくスポーツ界全体としても大変な記録として国際社会で評価を得ています。昨年の長野オリンピックで日本の金メダルの総数は百個になりましたが、そのうちの二十七個は体操競技で獲得したものです。私のことを言わせて頂けば、三回出場したオリンピックすべてでメダルをいただくことができました。トータルで金メダルが五つ、銀メダルが一つ、銅メダルが三つの全部で九つのメダルをいただきました。

さて、体操競技は難しくて、危険なスポーツであるとよく言われますが、体操競技は学校体育の競技です。鉄棒やマット、跳び箱など皆さんなされた経験があると思います。た

だしオリンピックの体操は人間の極限に挑戦するスポーツです。しかしこれはどのスポーツでも同じです。どのスポーツも目標の高さによってその難しさが決まってくるのです。だから体操競技自体は楽しく健康のためにもいいスポーツなのですが、目標を高くすることによって厳しく危険なものになります。我々の目標の最高の高さを競ったのがオリンピックでした。

オリンピックとは、世界中の人間が自分のもっている能力の限界をかけてそれぞれの国の代表となり、そうした人間同士が競いあう世界です。何がいちばん厳しいかというところ、自分自身のためにだけ、演技をすればいいということではすまないということです。これだけ多くの期待をうけてする競技会是他にありません。私が最初に出場したメキシコでは、初めての海外、初めてのオリンピックということで余りいい成績は残せませんでした。はじめ私も自分の演技をすればいいと思っていましたが、しかし代表に選ばれた時から、親戚や友人からの壮行会、学校、金メダルをとって当たり前と思われてしまう。また現地では入場行進のとき十万人を越す世界中の人の中のたくさんの方の丸、テレビを考えれば何百万、何千万人の人が我々の演技に期待している。当時は金メダルが当たり前、とらなかつたら大変という中での参加でしたから、そのプレッシャーはすごいものでありました。

なぜ当時日本が体操であんなに強かったのかといえば、当時体操競技のかなめは技術開発でした。東京オリンピックのとき「ウルトラC」という言葉が話題になりました。A、B、Cという難度の表記があり、それよりもっと難しい技のことを「ウルトラC」と言っていました。この言葉を使ったのは日本の体操選手です。東京オリンピックという地元開催のとき、絶対に勝たなければならないという中で、手足の短いスタイルには劣る日本

選手が、芸術性で負けてしまうからと、技術で上を目指しかなかったのです。Cより更に難しい技を開発して、山下跳びとか、遠藤ひねりとかという「ウルトラC」の技を開発したのです。そしてそこで優勝して、その技術開発は更に進み我々の時代に受け継がれて行っただけです。

私が体操競技に入るとき、実は私はこの魅力に取りつかれたのです。中学一年のとき初めて体操競技と出会いました。鉄棒でした。人間が鉄の棒にぶら下がってぐるぐる回る。鉄の棒はぐにやりとしなる。そして手を離し人間が高く跳び上がって落下する。「なんだこの競技は」というのが私が引き込まれたきっかけです。私は小さいころから人のできないことをやりたいと思っていました。ですからこれは私の世界にびったりだと思って体操競技に入りました。私はその後も人のできないことをやりたいという思いをずっと持ち続けていました。そして十年後、ミュンヘンオリンピックの前です。このとき私は瀬戸際でした。メキシコで余りいい結果は出なかったし、ミュンヘンの代表に選ばれるかどうかともわからなかった。つまり個性がなかったのです。そこで自分自身の塚原流の体操を作らなければならぬと思っていました。そんなとき友人と遊びながら跳馬をやっている、器用な友人がふざけた跳び方をしたのです。それを見て私も同じ様に跳んでみた。当時私は山下跳びなどの跳馬の跳び方が大変下手でどうしようかと思っていましたから、これを練習し何とか競技会で行うことにしました。これが成功しまして「塚原跳び」となりました。これ以来塚原流という新しい技に挑戦する私ができたと思うのです。

月面宙返り

実は私は空中でぐるぐる回ったり、ひねったりすることが苦手でした。この問題を克服しない世界では通用しないだろうという思いが大変強かったのです。ですからこの問題を解決するために、あるときトランポリンという特殊なスポーツがあり、我々も準備運動程度に利用したことがありましたが、そのトランポリンをやる人達が、空中で回ったり、ひねったりすることが大変上手なことに気がつきました。これをやれば空中感覚が身につくかもしれないと考え、オリンピックのちょうど一年前、シーズンオフのときにこのトランポリンを特訓したのです。そうしましたら彼らトランポリンをする人達は、体操競技の中では絶対にない動きをすることに気がついたのです。当時体操界では回るとひねるは別の運動で、別々に練習するものだったのですが、トランポリンの人達は回りながらひねるという動きをするのです。これを私は異様に感じびっくりしたのです。そしてこれを練習して何とか体操に取り入れられないか考えたのです。トランポリンで跳び上がる高さは約五メートルです。これと同じ高さといえば鉄棒の着地のときです。ここに応用するしかありません。五メートルという高さは想像つくでしょうが、二階の家の窓ではなく、屋根から飛び降りる感覚とご理解下さい。この飛び降りる間に縦に二回回っている間に横一回ひねりをしてから足から下りるのが月面宙返りです。そして下りるところには座布団三枚くらい、厚さ二十センチくらいのマットです。危険だ怖い競技ですねとよく言われますが、人間というのは不思議なもので、三時間ぐらいのトレーニングを毎日積み重ねてゆきますと、二階から飛び降りるくらい何ともない身体ができるのです。スポーツというのは不思議

議で、ひ弱な体でも鍛えてゆけば何でもできる様になるような気がします。

さて、とにかく私の頭の中ではやって見ようということが決まりました。しかし誰も考えたこともない下り方ですから、ビデオも写真もなければ手本もコーチもいません。すべて私の頭の中のイメージに過ぎないのです。とりあえず五つくらいの技術を考えて見ました。そしてひとつづつ挑戦しました。最初の方法をやって見ました。やった瞬間少し違っていたのです。でもその時はもう遅いのです。ものの見事に落ちて左肩を脱臼しました。三日ほどかかりました。二回目ときは、いけそうだと思ったのですがやはりだめでした。落ちたとき足首をねんざしました。一週間かかりました。三回目、四回目ときは、だめでしたけど体はだいじょうぶでした。五回目、これが結果的には一番良かったのですが、困ったことが起きました。それは一回目の半分ひねりで身体が鉄棒の方に向いてしまうため、今まで経験したことがなかった恐怖に襲われたのです。もしあたったらそのまま落ちるということになり、大きなけがをすれば代表にさえ選ばれなくなるといふ、時間という制約の恐怖は、相当強いもので三週間うまくいきませんでした。

しかし、小さいころから持っていた、人のできないことをやりたいという私の願望は、その恐怖感を払拭してくれました。三週間目の練習日、今日は絶対やるという思いがフツフツと私の心の中に燃え上がりました。でも回りの仲間が気になってしようがなく、彼等がいなくなるのを待ちました。練習時間が終わってから、一人で鉄棒のところに行きそれこそ無我夢中、思い切ってやってみました。そうしたら鉄棒にもぶつからずちゃんと回って着地こそしりもちでしたができたのです。次の瞬間自分の心臓が一メートルくらい飛び跳ねるような感覚になり吐き気がしました。十分くらい続いたでしょうか、体の震えが止

まりませんでした。しかしそれが納ったらできた喜びでいっぱいになりました。そしてすぐまた二回目に挑戦しました。できました。もう何ともないのです。嬉しかったです。三回目、もう大丈夫でした。

でもできただけでは、金メダルはとれないのです。四年に一回、与えられたチャンスはたった一度きりなのです。その一回に成功しなかったらだめなのです。世界一の技術があつても、その一回に成功しなければだめなのです。

私はこの月面宙返りをそれから練習しすぎまして、実はオリンピックの一月前に、右ひざに水がたまつて腫れてしまい関節炎を起こし、代表は無理かという役員会にかけられるところまで行つてしまったことがあるのです。

その後いろいろな先生のお陰で幸いにオリンピックに出場することができました。そしてあとから考えると、この関節炎を起こしたことが幸いしたと思つています。といひますのは、このことによつて右足の調子が悪く、他の競技が全てうまく行かなくなつたのです。種目別の鉄棒は最後の競技の一番最後の出番です。私はこの鉄棒、この月面宙返りがうまく行かなかつたら私の今回のオリンピックはなかったと同じであるというふうに見えてきました。そしてこのことによつて、精神がすべてこの鉄棒に集中できたのです。普通ならものすごいプレッシャーを感じながらの演技だったかもしれないのが、その時は演技だけに集中できたのです。前の演技者からの待ち時間三分ほど、その中で普通なら起こる様々な不安や嫌な思ひ出、しかしその時は心地よい緊張感の中、静かに自分の演技に入れたのです。演技時間四十秒ほど、いよいよ最後の月面宙返りだ、これを成功すればすべてが終わり、その時間一・七秒くらい、その間に回転が少し早いと思えば手を伸ばし、少し遅

いなと思えば手をちぎめて足から下りる様にするのです。そして着地した瞬間にすべてが決まるのです。下りた瞬間二、三メートル先のマットが見えました。成功です。この瞬間言い様のない感動に襲われ、はずかしながら涙を見せてしまいました。得点は九・九でした。その瞬間には世界で私しかできない技「月面宙返り」での金メダルです。本当に体操競技をやっていてよかったと思いました。

でも本当のことを言うと、金メダルが欲しくてこの競技に挑戦したのではなく、人のできないことをやりたい、苦手だった空中回転をうまくやりたい、というそのことがこの結果になったと思うのです。そしてできたことはまさに「運が良かった」、よくそ運を見方につけたものだと思ったのです。なぜかと言えば、着地した時に目の前が見えていたから成功だったのです。もし天井が見えていたら失敗なのです。目の前と天井の差は〇・〇〇何秒です。その差で天国と地獄なのです。運がいいと言うしかないのです。金メダルを取った人どなたに聞いても、「俺はとるべくして金メダルをとった」などと言う人は一人もいません。「皆さんのおかげです。本当に運が良かったです」と言うのです。清水選手にしても、あの山下選手にしてもそうです。なぜかと言えば、この頂点の技術の勝負というものは、まさに一瞬の勝負ですから、その瞬間には自分でもコントロールできない世界があるので、「運が良かった」と言うよりほかないのです。

日本の体操は次のモントリオールで五連勝を勝ち取るわけですが、その時などはまさにそうでした。アクシデントが連発したのです。エースの笠松選手は盲腸になり、補欠と入れ替わったら、予選で二番になってしまった。決勝では新人の藤本選手がひざを骨折して退場してしまった。このとき世界中の誰もがこれで日本の優勝はないと思ったわけです。

でも奇跡は起きたのです。残り三種目を五人で全力で戦い、最後私の鉄棒で〇・四の差で逆転優勝をしたのです。新聞には「神風が吹いた男子体操」という言葉がありました。選手が頑張ったとは書いていないのです。なぜか、誰も信じられないのです。エースはいない、選手は一人足りない、こんな中で優勝できたのは、運が見方したとしか誰も思えなかったのです。私たちもそうでした。このどうしたら強運を自分のもとに引き寄せられるかは、私たちの大変な課題なのです。人間が一所懸命にやってもうまく行かないことはたくさんあります。体操選手なんか世界中に何百人といえます。オリンピックに出られる人だって何百人といえます。でも金メダルを取れる人はたった一人だけです。

ただしこれだけは言えることは、月面宙返りを成功させた自分も、モントリオールで優勝したメンバーも、どんなことがあっても最後までなげき、優勝をあきらめないという強い信念のもとに頑張った姿勢があったことです。もうだめだと思ったら、我々の世界はおしまいなのです。「まだまだ」と、「もう」が、天国と地獄の分かれ道なのです。

運をつかむ

そしてこのことを次の時代に伝えなければならない使命が、私たちにはあると思うのです。ご存じのように日本体操も、この間のアトランタオリンピックでは十番まで落ちました。そして今復活をかけて頑張っている中に、塚原直也という新人が頑張っているわけです。何を隠そう私のひとり息子です。スポーツの世界では素直な子が一番先生からかわいがられ伸びるんです。だから「直也」とつけました。お陰様で結構素直に育ってくれま

して、六月にはNHK杯兼世界体操競技選手権日本代表選手決定競技会で優勝させて頂きました。でも最初は体操をやってほしいとは思いませんでした。本人がやりたいことはすべてやらせてあげました。野球、ピアノ、サッカー、ゴルフなどでした。結論的にはサッカーが一番興味があつたようでした。そして直也が十歳のときソウルオリンピックをソウルまで見に行きました。それがどうもきっかけでした。オリンピックの本物の体操を目の前に見てすごい感動をしたようでした。家に帰ったら彼はすぐ「僕は体操競技をやつて、オリンピックに出て金メダルをとりたい」と言ったのです。これに私が感動しました。私もコーチをやつて何人も子供を見てきましたが、たいいてい日本一になりたいで終つていたのです。でも直也は違つていました。今現在日本一になつても、彼はまだ上を見えています。来年のシドニーオリンピックです。最初の志が違ふのです。

ですから親としても真剣になりました。現在世界一の指導者をつけようと思ひました。そこで現在世界一のロシアの体操指導者、我々が共に戦つたニコライ・アンドリアノフ氏を招き、直也のコーチにしました。これで環境はそろつたということで、着々と来年を目指しているわけでありす。あと一年です。その一年で直也に伝えるべきことは、先程から申し上げている「いかに運を身につけるか」であります。努力したことがむくわれるということがわかるということです。「人事を尽くして天命を待つ」という言葉があります。が、なかなかそういう心境までなれないものであります。でもこの本当の意味での開き直りができる自分が作れるように、指導してゆかなければならないと思つています。

「体操日本」の復活のためにどうぞ皆さんの応援をよろしくお願い致します。

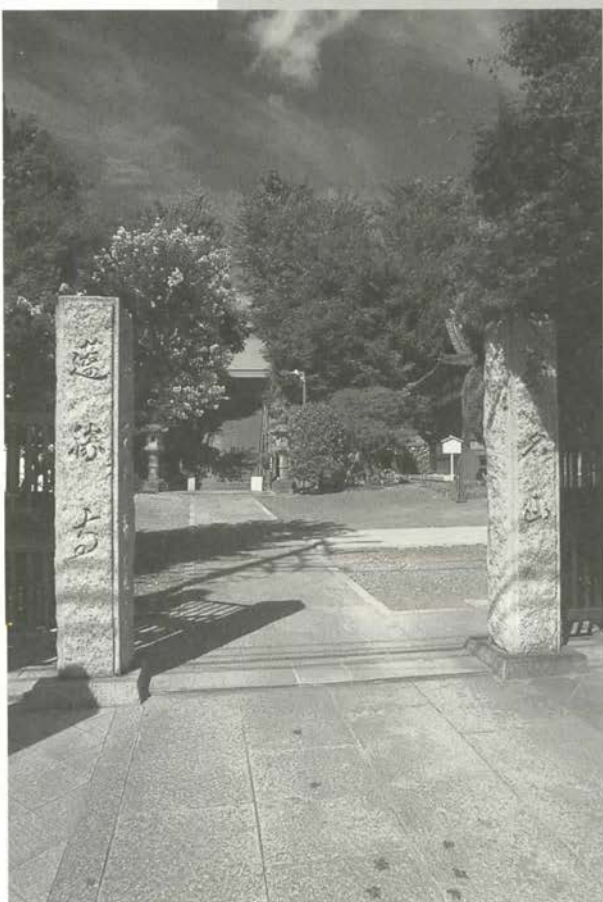
(一九九九年六月八日芝・増上寺 東京教区檀信徒大会講演より)

寺院紀行

横浜・菊名

蓮勝寺

山門から見た蓮勝寺境内。正面階段奥が本堂



写真／夕力才力邦彦
文／真山 剛

蓮勝寺は鎌倉時代末期の正和四（一三一五）年に創建された関東の古刹のひとつである。

創建から今年で六八四年という月日を刻みながら、その長い歴史の中でたったの一度も、焼失や倒壊に遭っていない。七百年近くの古刹、しかも関東にあつては誠に貴重な寺院と言つてよいだろう。

その蓮勝寺がこの秋、本堂の修復と増改築、書院客殿の新築を終え、落慶を迎えることとなった。そして特筆すべきは七百年前の開山上人が自ら造つた一室を書院客殿内に復元したことである。

寺名にその名を残す蓮勝上人は浄土宗の第五祖。常陸の国、現在の茨城県の出身。鎌倉光明寺で第四祖良暁上人のもと浄土宗の法灯を受け継いだ浄土宗を代表する名僧である。その人となりは後述するとして、その上人がこの地に一字を建立したいきさつを『蓮勝寺の沿革』、『蓮勝寺だより』を参考にお伝えしよう。

師良暁上人から宗脈相乗される五年前、正和四年の秋のことである。故あつて故郷常陸の国に向かう蓮勝上人の姿があつた。

鎌倉から今の横浜、東京を抜けるにはいくつかの道があつたが、上人は鎌倉街道下道（しものみち）を急いでいた。

秋の日は短い。神奈川帷子も過ぎ、小高い丘にさしかかった。

その道は今も昔の道幅のままで残っている。当時はいざ鎌倉とい



境内の東北にあたる旧鎌倉街道（写真右手）。蓮勝上人はそこから沈みゆく太陽を眺めた

う時に馬二頭が並んで疾走できる大道であった。今もその道幅は変わっていないが、車社会では一方通行の道となり昔日の面影はない。

行き交う人もこの道がかつての鎌倉街道と知らないに違いない。

さて、その道が尾根道となった時である。東西に視界が開け、西日に道が染まっている。帰郷を急ぐ上人の目に赤く染まった道がふいに飛び込んできた。

鎌倉から時の経つのも忘れ歩き続けてきた上人は、そのあまりの赤さに目を奪われ、ふと顔を上げた。

と、そこに広がる景色に思わず絶句した。

夕焼け色の大空に浮かぶ真紅の太陽。すぐ脇には霊峰富士の雄大なシルエット。さらに尾根道の下には野菊が一面に咲き乱れ、やはり紅に染まっている。

ここは極楽浄土か――。

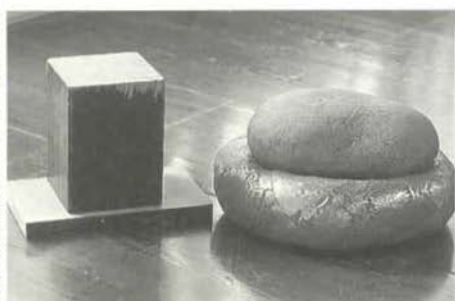
無意識に夕日に向かい両の手が合う。知らぬ間になむあみだぶつが口をつく。

浄土宗の拠りどころとする浄土三部経のひとつ、『観無量寿経』に説かれる日想観を目のあたりにした上人は、草庵をこの地に結ぶ。

自ら大木を切り出し庵を造り、御持仏の阿弥陀如来を安置した。

前庭には自ら伽羅カハラも植えた。そして野菊にちなみ、またみずからの

大切に築かれている創建当時から使われてきた柱や石



名を冠し、その草庵を菊名山蓮勝寺と名付け、上人が関東に建立した関東十六庵室のひとつに数えられるこの古刹が誕生した。

浄土宗の法灯を継ぐ上人がこの現世の極楽浄土の草庵、蓮勝寺に長く住み着くことはできなかった。しかし里人がその教えを守り、上人の徳を慕って鎌倉から来た武士が定住した。そうして念仏道場としての今に至る歴史が始まったのである。

その後室町末期に中興喜楽上人が伽藍を百メートルほど南西に移し現在に至っているが、やはり今も小高い丘の上に境内が広がっている。その墓所からは当時の鎌倉街道下道も見える。だが蓮勝上人が極楽浄土と仰いだ景色は様変わりし、今は住宅街となり野菊の姿はどこにもない。富士の裾野に沈んだ夕日もいまでは新横浜のビルの谷間に消えていく。

こうした景色の移り変わりが、単なる景色の様変わりとともに、私たちの心の中までも変えてしまったと感じるのは私だけではないだろう。

さて、開山蓮勝上人のその後だが、宗脈相乗ののち郷里に帰って念仏布教に専心した。蓮勝上人にはこれといった学問的な特色はなかったが、徳、名声とも高く多くの子弟が集まった。その中には浄土宗の中興の祖といわれる浄土宗第七祖聖岡上人、茨城の瓜蓮に関東十八檀林のひとつ常福寺を建立した了実上人といった、錚々たる



新客殿玄關脇のお釈迦さまの誕生仏。
右隣りの石はヒマラヤをイメージ



新客殿建設のきっかけとなった伽羅の樹。蓮勝上人お手植えの遺品として枯れたあとも保存してある



運慶作日本三毘沙門に数えられる毘沙門堂。左利きの毘沙門天と親しまれている

高僧がいる。

地味ながら要。決して歴史の中で目立ちほしくないが、上人がいなくては今の浄土宗はなかったともいえるのが、蓮勝上人なのである。

こうした上人の遺構、遺徳を伝える蓮勝寺にひとつの大きな出来事が起きた。五年前、上人お手植えの伽羅が枯れたのだ。

「平成六年に開山上人お手植えの古木、伽羅が枯死してしまったのです。樹齢七百年近い古木です。別に特別なことをしたり、何かあったわけではありませんが、私の時に枯れてしまったのです。」

それは慌てました、幸いにも長い年月開山上人のぬくもりを伝えるもののひとつです。上人のことを、そして法灯を守ってきた先達を考えると非常な責任を感じまして……」

第三十三世、柴田哲彦住職はインタビューの冒頭にしみじみと語った。だが、これがきっかけとなって今度の落慶となり、むしろ開山上人の遺構、遺徳を今後さらに守り続ける基礎固めができたのである。

柴田住職はこの落慶をこう位置づける。

「伽羅の枯死が良い材料となり、むしろ開山上人の遺構、遺徳を守るための事業となりました。もちろん発展途上のこの寺ですので、節目を迎えての一期工事ではありますが、無事落慶して一種の安堵感を感じています」



蓮勝寺からすぐのところにある菊名神社。鎌倉八幡宮と縁が深い

開山上人のぬくもりや教えに触れ続けられるための建築計画を檀信徒に相談したのは平成八年の七月。話は総代、世話人の間ですぐまとまり、工事費用の勧募となった。一口いくらとはせず、強制もしなかった。半年で集まった金額は当初の予想の五割増し。

一万円から一千万円という寄附が地元の銀行に振り込まれる。寄附するのは檀信徒ばかりではない。寺の行事に参加する一般の方、地区の老人会、先代が建立した韓国人墓の関係者、中には他宗の方もいた。また、どこで聞きつけたのか、以前に頼まれてお経をあげた方の娘さんからも現金書留が届く。

不況のご時世に住職も驚くばかりだった。

そうした方はもちろん、寄附できなかった方へも住職は手紙を出した。ご寄附できなかったからといって気兼ねはしないで下さい。遠慮なくお寺に来て下さい、と。

住職のこうした気遣いの背景には、一宗派に限ってはならないという先代から守られてきた教えがある。それは、檀信徒に限らず有縁の方一人ひとりを大切に、という教えである。

それは数多い蓮勝寺の行事を見ればすぐわかる。

礼拝会は現在八十六名の会員に支えられ二十七年目を迎えた会。檀家は二割強で七割以上が一般の方。入会金、会費、供物は一切なし。出欠もとらずに二か月に一回で、住職の浄土三部経の講義、礼

歴代上人の墓。インド、中国、日本という三国の石が使われている



拝、そして話し合いを楽しむ。年に一回は比叡山の黒谷に結集し日想観、夕日に向かって念仏を称える。礼拝が一万回を数えた昭和五十二年にはお釈迦さまが悟りを開いたインドのブッダガヤに結集し、仏教誕生の地で一万回目の礼拝を行った。

子供修養会は年に一回。戦中までの日曜学校にかわり、夏休みに一泊二日で行う。地域の小学生が主体で三十〜四十人が集う。檀家の子は一〜二割。昼間は写仏し、夜は暗闇の中にもろうそくを灯し香を焚く。子供が写仏した仏を開眼し、一人ひとりに数珠を授ける。

子供たちにとって貴重な体験となるのは言うまでもない。

大人のための修養会は毎年五月の日曜日。百人が集うこの会は、かつての五重相伝のおさらい会が発展したもので、若い人の参加も多い。この他にも新盆を迎える檀家信徒のための新盆を迎える会。また鎌倉からお寺まで金剛杖をつきながら、三十六名で歩いたこともある。とにかく檀信徒といういわばメンバーだけでなく、一般の方も参加できるオープン行事が目白押しである。

地域のお寺といいながら、結果的には檀家や信徒にだけ門戸を開くことになるお寺は多い。仏教に期待する人々にとって仏教に触れる場所はやはりお寺である。現代人は僧侶が考える以上に寺に自由に出入りすることを望んでいるのだ。

そうしたニーズに応えることができるか否か。一信者として僭越



韓国では有名な蓮勝寺の在日韓国人の墓。先代住職が尽力した

だが、これがこれからのお寺の命運を分ける鍵かと思う。こうして多く寺院を回っていると檀信徒はもちろん、如何により多くの人に來てもらえるか、いかに社会一般と関われるかが重要視される時代だと肌で感じるのである。

さて、余談が過ぎた。蓮勝寺の落慶に戻ろう。

前述した開山上人の自ら建てた庵室は開山の間として客殿の二階に移築した。余った柱も大切に残されている。また奥庭は二代目となる伽羅、開山上人をあらわす石、念仏の広がりイメージする流水（枯山水）と凝っている。その他数えればきりがない。また枯れた伽羅も専門家をお願いして原型を留める形で本堂に飾ってある。

とにかく開山上人の遺構、遺徳を少しでも、という住職の切なる気持ち伝わってくる。しかし費用はかさんだに違いない。

だが、それも「寺は最後に帰る場所。何百年も続くことを考えれば良いものを」という若い世話人の一言でまとまったという。

まさに蓮勝寺ならではの長い歴史と、寺とそこに集う人々の信頼が結実した落慶なのである。

柴田住職は大正大学での教鞭を置き、今は寺に専念する準備の最中にある。開山上人の遺構保存とともに広くした本堂、そして客殿も、寺での行事をより充実させるためであることは言うまでもない。古刹蓮勝寺の境内はますます賑わうに違いない。（ルポライター）



凛々しく真面目な人柄が印象的。
蓮勝寺第二十三世柴田哲彦住職

今月の表紙

重台蓮

蓮

LOTUS

11月

池の中に蓮華あり

大如車輪

青色には青光あり

黄色には黄光

赤色赤光

そして白色には白光ありて

微妙香潔なり

舍利弗よ

極楽国土には

かくの如くの

功德莊嚴が成就される

・

蓮華

この不可思議

たとえ七寶池八功德水なくとも

小さな泥田に

咲く

美しく咲いて

いる

蓮の誕生

蓮は非常に古い被子植物です。いつごろから地球上に現れたかは不明ではあるが、恐竜が栄えていた時代の白亜紀中期（1億4千万年前～8千万年前）に存在していたことが蓮の葉の化石が、ヨーロッパ、シベリア、アラスカなど主に北半球で発見されている。わが国でも白亜紀後期（7千万年前）の蓮の葉の化石が、北海道、福井県、京都府、佐賀県などで発見されている。特に福井県池田町血尾で昭和27年発見された蓮の化石は、アジア最古の蓮の化石で「トウヨハウス」の和名がついている。

表紙写真と文

三浦功大

1942年 宮城県登米町生。蓮に関する総合誌「蓮の話」を毎年発行・責任編集（現在3号までに至る）していることをはじめ、展覧会、講演会、その他イベントなど精力的な活動を通じ、蓮を軸とした多くの文化人の結集を実現させ、注目を集めている。主な写真集、著書に「JAZZ in JAPAN 1963-1974」（西田書店）、「蓮の文庫史」（カド館房）などがある。

「書きおろし連載小説」

石丸晶子

法然上人を
めぐる人々
式子内親王の生涯

第七回 女院と法親王、式子を見舞う

十六

「守覚さん」

じつと守覚のいうところを聞いていた式子
が、そう呼びかけた。

「合わないではありません。帰依している
のです。けれども、わたくしはみ仏に帰依す
る前に、人の世の愛がほしい。人の世の賑わ
いにうしろ髪をひかれるのです。はじめてお
会いましたその日から、わたくしは法然さまを
恋しました」

「何とまあ、斎院が御僧に恋をするなど、聞
いたことはありません。あなたは、わたくし
を驚かせることばかり口にされる」

貴族社会の伝統に従順な性格の亮子にとつ
て、真実、式子のことばすべてが、彼女を驚
かせていた。

式子のいうことすべてが、彼女の性格の枠
外、思考の枠外にはみ出しているのだ。胸に
動悸を感じながら亮子はいった。

「御室、これは一体どうしたことです。何か
仰せられませ」

「——いや、斎院も人の子。人を恋うる心に、
斎院も何もありますまい」亮子に促されて、
やがて守覚はそういうと、

「されど、斎院がいかに法然房を慕われたと
て、それはかないませぬ。世の中には、願っ
てかなうことと、願ってもかなわぬことがご
ざいます」

持ち前の澄んだ、しかし落着いた声で守覚
はつづけて、

「まして法然房は、高德のきこえ高い御僧。
お諦めにならねばなりませぬ」

「諦めませぬ」

周りがハッとする激しさで式子は弟のこと
ばを打ち消した。

「諦めませぬ。女に生まれて、はじめて恋を
知ったのです。この心を実らせることなく、
死ねませぬ。後世などほしくありません。今、
現世で、わたくしは愛したいのです。法然さ

まにお会いしたいのです」

「何とまあ、恐ろしいことを」亮子が絶句した。

そして表情を硬ばらせたまま、

「浅ましい、浅ましい——」と小さく口の中で呟いている。

だが式子は、このひとときに鬱積した心の想いを一挙に吐きだしてしまおうとでもするごとく、病み疲れた人とは思えぬ激しさでさらに、

「病んで臥している日々、心に浮かんでくることがあります。保元元年、女院さまは十歳、そして守覚さんは七歳のとき、神仏に仕える道へと追われていかれた。その日の母上や、母上の後見をしておられたお祖父さまのお嘆きがよみがえるのです。わたくしは八歳で、まわりに起こっていることをすべて心に止めておりました。大人たちが子どもに隠そうとしてのことまですべて」

ことばを切った式子は、しばらく呼吸をと

とのえてから、

「守覚さんのあとは好子姉上が、つづいてわたくしが、そしてそのあとは以仁と休子が、みな世俗に生きることをゆるされずに、齋宮、齋院となり、寺に入りました」

十七

式子たちの母高倉三位成子も、成子の父藤原季成も、六人いる式子のきょうだいのうち何人かは成人するまで手許で育て、世俗にとどまってそこで栄達する生涯を、送らせたかったのである。

だが、保元の乱（一一五六）が起きたのは、亮子が齋宮に卜定されたまさにその年であり、時代はいまだかつて日本の歴史が経験したことの無い大動乱に向かって、激しく動きだしていた。

この同じ年の暮れ、守覚がまだ七歳で仁和寺に送られたのも、ひとえに、きびしい時代のなせるわざといつてよい。

当時、帝位にあった後白河天皇の二男守覚の存在を、まだ幼いとはいえ、保元の乱の渦中の人たる亡き鳥羽上皇の皇后美福門院や、その周囲の人々が警戒したのである。

守覚にその気はなくても、天皇のこの二男を担ぎあげようとする人間が、この先、出てこないとも限らなかった。

そして、以仁が寺に入ることになったのも周囲のこのような思惑からであり、また式子の姉妹が伊勢や賀茂の神社に送られていったのも、公卿社会が皇女たちを利用する、それが一番無難で利用効果も高い道だったからにほかならない。

「齋宮、齋院に卜定されたことがどうしたと
いうのです。その道を生きるのが皇室に生ま
れた者の定めではありませんか。伯母上の
上西門院^{じようさいもんいん}さまも、八条女院さまも、みんなお
若いうちに世を捨て、御出家の道を進まれた
のです。何もあなただけではありませんよ。
守覚さんも仏門に入られて、総法務にまでな

っておられるではありませんか」

式子のことばに亮子がいった。

「それでは姉上は、こんな気持ちに襲われたこ
とはないのでしょうか」

「どんな気持ちです」

「世の賑わいをよそに、神仏の道に進まされ
ていったことです。身のまわりを見回すと、
還俗した以仁以外、姉上も守覚さんも独り身
のお淋しさです。わたくしはそんなわたくし
の身の回りをみて、淋しくなりません。虚
しいのです」

「やはりあなたは変わっておられる。淋しい
のであれば上達部^{かんたつめ}や殿上人^{てんじやうびと}など、あなたの御
身分にあった方の集いに出てこれればいい
ではありませんか」

「姉上」

式子は亮子のことばをさえぎると、

「わたくしはそんなことを申し上げているの
ではありません。そんな集いに出て、虚し
くなるばかりでしょう。愛し合うことがなけ

れば」

「あなたはいつまでそんなことにこだわって
おられる」

亮子の表情には、不機嫌ないろが漂つてき
た。

「それ程お淋しいのであれば、今度、上皇さ
まから東宮さまを猶子ゆうしにというおことばを頂
かれるより先に、なぜ、どなたか適当な方を
猶子になさらなかったのです。わたくしなど、
以仁の遺児をはじめ何人かの姫を猶子にもら
うけて、淋しいとか虚しいなどと思ったこ
とはありませんよ」

十八

それまで黙して姉たちの会話をきいていた
守覚が、口をひらいた。

「たしかに、われらはみな、幼いうちに神仏
の道に進んでいった。齋院のいわれるように、
われらきょうだいの身のまわりは、世俗の賑
わいからは遠い」

守覚はそこでことばを切ると、じつと式子
に眸ひとみをそそいで、

「しかし齋院、それゆえにわれらは、このき
びしい乱世を生き延びたではありませんか。
神仏の道に進むことなく、もし我らが俗世に
止まっていたとするならば、どうなりまし
たか」

「・・・」

「還俗した以仁をごらんなされ。源平の争乱
にまきこまれ、あのような最期をとげました。
姉上たちとて、平家とともに都落ちすること
になったかもしれませぬぞ。生きてきた道を
ふり返れば、すべては仏恩であつた。そうは
お思ひになりませぬか」

守覚はしみじみと

「姉上も御病床にあるとはいえ、乱世にまき
こまれることなく、今、こうして美しい屋敷
に住んでおられる」

「この屋敷などいりませぬ」

守覚のことばに、鋭く式子は切り返した。

「わたくしは、このままでは死ぬに死にきれません。法然さまへの思いを断ち切れないのです。この十余年、法然さまをお慕いするだけで恋を実らせることなく、わたくしに死ねと仰せられますか」

病み疲れた式子の両眼から涙があふれ、彼女は肩をふるわせて泣きに泣いている。

「何と業の深い」

その式子から目をそむけると、口のなかで亮子が呟いた。

「さすがは法然房よ」

亮子の側らで、やはり亮子からそつと目をそらした守覚が、低くそう呟いたのは、あることを思い出したからである。

三十年近くも前のことだ。彼らきょうだいの叔母である高松女院^{しほ}姝^し子が、当時、唱導によって名声をはせていた大僧都法印澄憲の子を妊^みるといふスキャンダルを起こしたのである。

鳥羽上皇の皇女姝子は、守覚の異母兄で後

白河の長男二条天皇の中宮であった。

だが、短い結婚生活後、天皇は崩御・姝子は天皇生前中から夫婦仲が悪く、別居ののちに出家までしていたが、天皇の死後、澄憲を愛するようになり、海恵という子を生むまでの仲になったのである。

出家した女院が、出入りの大僧都の子を出産する。

これがもし公になれば、高松院も澄憲も処罰され、宮廷社会から追放されることは必定であつた。

そこで、関係者のあいだで事件は極秘裡に処理され、二人のあいだの子海恵は、早くから守覚が預つて育て、今、仁和寺の僧の一人になつている。

守覚はこのことを思い出したのだ。

これがもし、澄憲であつたならば――。

だが、長年のあいだ式子にここまで慕いつづけられても、法然房はそこにつけこむようなことは全くしない。

「さすがは法然房よ」

守覚はふたたび低く呟くと、まじまじと式子をみつめながらいった。

「姉上、姉上がいかに御房を慕われたとて、その恋は実りませぬ。法然房は叡山にいた頃、二十五年という長い年月、衆生救済の道を求めて苦悩したと聞いています。その御房が、何で一人の女性に心を傾けましようぞ。それよりも姉上は、御房にはじめて会われたとき、御房と手をたづさえて衆生救済に力をつくそうと約束されたというではありませんか。慕う煩惱などは捨てて、御房とのお約束に生きようと、なぜなさいますか。後世などほしくないなどと、迷妄もいい加減になされ。今のままでは、真実、姉上は救われませぬぞ。法然房は往生されよう。されど姉上は、未来永劫、このままでは後世でも御房に再会はできませんまい」

(この章終わり)

石丸晶子(いしまるあきこ)

東京生まれ、東京大学大学院人文科学研究所修了。現在東京経済大学教授。一九九一年、『式子内親王伝―面影びとは法然―で第一回紫式部文学賞を受賞。著書は他に、『法然の手紙』(人文書院)『お手紙から見る法然さま』(浄土宗出版室)『現代語訳蜻蛉日記』(朝日新聞社)など多数。

記 時 歳 教 仏

平安時代中期の念仏聖、空也上人の忌日は、陰暦十一月十三日です。

空也忌や空也が胸の中をゆく

竹腰八柏

一か所に定住せず各地を遊行した念仏聖。その忌日俳句として「胸の中をゆく」は如何にもびつたりします。作者も何処か孤独の旅の空にあるのでしょうか、その心境がしみじみと伝わってきます。

十八日から二十八日、藤沢遊行寺では別時念仏そのものほもちろん浄土宗、元祖大師法然上人のお説きになったもので、法然門下の各流派で盛んに行われるようになったのです。

その門流のひとつ真言宗では、御正忌（報恩講）つまり親鸞忌が行われます。陰暦十一月二十八日。いまの太陽暦に直すと一月九日あたりになるため、東本願寺では十一月、西本願寺では一月となっているようです。

十一月

野に山に報恩講のあかりかな

前田普羅

浄土真宗のお寺何処でも沢山の人が集まっている様子がしばれます。この頃は寒いけれどおだやかな日和が続きます。それを御講風と呼ぶと歳時記には見えます。

上の子のとはりにする子御講風

島田花穂

古き伝統技

三代にわたる信頼

有限会社

浄土宗法衣専門

古島法衣店

〒111 東京都台東区元浅草4の2の1
電話(03)38421289
振替0018012145231

新連載 雑誌『浄土』を支えた人々

列伝

佐藤賢順上人 について

賢順上人と賢順博士

仏教ルネッサンス再び。
珠玉の一冊『念佛讀本』の
執筆者たちの足跡

峰島旭雄

佐藤賢順博士（一八九九「明治三二」年—一九六二「昭和三七」年）は、「比較宗教哲学」という宗教研究上の新しい分野を開拓された哲人である。遺稿『宗教哲学』（理想社一九六三年）にしても、博士論文をもととする『宗教の論理と表現』（理想社、一九六二年）にしても、これまでキリスト教を基盤にした宗教哲学の多い中で、仏教思想を基盤とする、しかも新しい手法（方法論）による宗教研究の道を開いたのであった。昭和二年から大正大学において醫科に接した私にとって、博士はそのような学者であり、大学教授であられた。しかしそれは博士の半面のみであったことを後になって知った。そして今、『念仏読本』のこの「死」という文章に接し、ますますその感が深い。宗教哲学者の佐藤賢順博士があつて、念仏信仰・実践者の佐藤賢順上人があるのではない。その逆なのである。

「死」を執筆するにあたり、賢順先生は「宗教哲学的考察」という求められた題は取り止

めたと記している。そのこと自体が難しく、この難しいことをかりに書いたとしても読む人は少ないであろうから、というのである。ご自坊の品川願行寺のご本堂で檀家の人たちを集めて『般若心経』を身読、やさしく解説しておられる賢順上人の姿が目につく。（この信仰の集まりを「勝友会」という）

しかしまた、このやさしさにみえる「死」の文章には、ちらりとニーチェ、マックス・シェーラー、フオイエルバッハの名が見えることも、見落としてはならない。賢順先生には三十歳台に、当時の学風に先んじて、シェーラー、フオイエルバッハ等に関する優れた業績があるのである。したがって、この「死」の文章は、その実例に即した読み易い、人々を信仰に導く、啓蒙的な表現の背後に、「宗教哲学的考察」という深い層がじつは隠されているのである。

賢順先生はご自身のお子さんのこと、親友のこと、蟹さんこと尾上蟹十郎丈のことなど、

実際にあった具体的な「死」を通して、淡々と筆を進めておられる。「死」はその本人が主観的に経験することはない。本人は死んでしまふのだから。しかし、他人の死なら客観的に経験することができる。これが「死」に関する第一の逆説である。だが、もう一つの逆説がある。諸行無常であって「死」は例外な



在りし日の佐藤賢順師。NHKにて

くやってくる。この人も死んだ、あの人も死んだ。けれども、自分の「死」は必然的であるとは認めたくない。これが第二の逆説である。それは私どものいつわらない心情である。「死」への恐怖がこの心情を増幅する。ここに生物学的な「終わりある死」に対して、「死を越えた死」、つまり「宗教的な生」が要請されるのである。

幼年の死―無意識、青年の死―意識的、老年の死―諦め・超越など。年令による死への思いの諸様態がある。東西の祖師たちの多くは青壮年の時期にその宗教への発足を始めている。「死」の問題が「瞬間」にかかわり、「死」の超克が過去―現在―未来に、とりわけ未来にかかわることも指摘される。

このように「死」を語り来たり、「死」を語り去った賢順先生ご自身は、どう「死」に面されたであろうか。大正大学西洋哲学科主任教授として、私ども後進の指導に当たられ、カントやトマス・アクィナスやルドルフ・オ

ットーなどの原書講読をする一方、いわゆる
科研究費による「信」の総合的研究、前記博士
論文のもとになる比較宗教哲学の所論文等、
それらを携えての国際宗教史会議での研究発
表、加えて大正大学文学部長など大学内、そ
して浄土宗内の要職、ご自坊の法務・信仰運
動、法然上人鑽仰会『浄土』誌ほかNHKな
どのマスメディアを通じての布教、身体が三
つも四つもあっても足りない文字通りの東奔
西走のなか、昭和三十七年三月二十八日、旅

先の愛知県金谷のお弟子さんの寺で倒れられ
た。満六十二歳。急の訃報に接し、私どもは
翌早朝にご自坊の願行寺で先生のご遺体をお
迎えたのであった。
賢順博士か賢順上人か。冒頭にも述べたよ
うに、法然上人を鑽仰しこれを弘通させ、念
仏実践者である賢順上人が「為先」である
と思う。先生の開拓された「比較宗教哲学」の
領域も根幹となる宗教体験なしには不可能だ
からである。

(芝学園理事長・東京芝廣度院住職)

仏教ルネッサンス、再び
珠玉の一冊此処に復刻成る

完全復刻『浄土』昭和十一年十一月號持輯

念佛讀本

執筆者一覧

石眞大佐中椎
井野野藤村尾
教正法賢辨辨
道順道順康匡

楠小佐江島笹
垣西藤藤野本
眞存春滋植成
我祐夫英祥浄

中松梅矢井
野浦原吹川
(日次登場順)
善眞慶定
英一隆輝慶

念仏者必携の書！【特別頒価二千円—送料込み—】

■申し込み・問い合わせ■
法然上人鑽仰会
〒105 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
電話：03-3578-6947/FAX：03-3578-7036

御法語に聴く

ただ仏の御詞ごことばを信じてうたがなければ、
仏の御ちからにて往生する也。

【十二箇条の間答】

「わが名を称えるものは、必ず救い導くぞ」との
阿弥陀さまのお言葉を信じて疑うことがなければ、
阿弥陀さまのお力によって往生が叶うのです。

楽しみに

一般には難解であろうと思われる教学の書をはじめ、信者さんやお弟子さんに宛てた手紙、あるいはそうした方々が法然上人に尋ねた質問とそれに対する上人の答えからなる問答の類いなど、上人が残された「おことば」は、相当の数に上ります。これまでこの稿でご紹介してきたいわゆる「ご法語」は、実はそうしたもののほんの一部分にすぎません。お手紙一本をとっても、かなり長いにもかかわらず、紙面の都合等上、そのごく一部しかここに掲載することができていないのです。

さて、そうしたものを読んでいて、ひよんな疑問が起きました。それは「極楽浄土って、ほんとうにあるの?」といった質問が見当たらないことです。質問がない以上、答えがあるはずありません。私の読み込みが足りないのかもしれませんが。(ご存じの方、お教えください)。

極楽の存在というものに「?」をつけていた人は、当時いなかったのでしょうか。いいえ、そんなはずはないでしょう。素朴といえ

ば素朴な疑問ですから、いつの世とても変わりはないはずです。それとも、思っているよりも大胆なことかとはばかって、実際に尋ねるのを思い止まったのでしょうか。

質問はもつばら「私はずいぶん罪を犯してきましたがそれでも浄土への往生は叶うでしょうか」、「どんな行を積みば往生できますか」というように、いわば「極楽はある」という大前提が敷かれた上でのことに集中しているようです。なかでも、自分自身の現実の姿や、いたらない心、それまでの行動なりを省み、「それでも往生したいのですが…」という強い願いが感じられる、切羽詰まった質問が少なくありません。今回ご紹介したご法語も、そうした疑問に対するものです。実に明快な、力強いお答えではありませんか。もつともこれだけではなお疑問も残ろうかと、あるたとえ話をこのあとに続け、質問者を納得せしめる十分な答えとされています。

ではもし、法然上人が「極楽はあるか」の質問を受けていたら、どのようなさつたでしょうか。

上人の時代から八百有余年。人体組織や人格形成の秘密が遺伝子に隠されていることが明らかとなり、何万年という途方もない距離を隔てた宇宙の先のことか解明されつつあります。「なんでもできる、なんでもわかる」とさえ思われている（実は甚だしい勘違いなのですが）この時代にあっても、しかし、確固たる物証、数字などで示すのは不可能なことがあります。——死。

確かに言えるのは、誰もが自分自身の死を経験すること、そしてその時にこそ、おそらく死のあらゆる不可解性がその人にのみ明らかになること。この二つではないでしょうか。

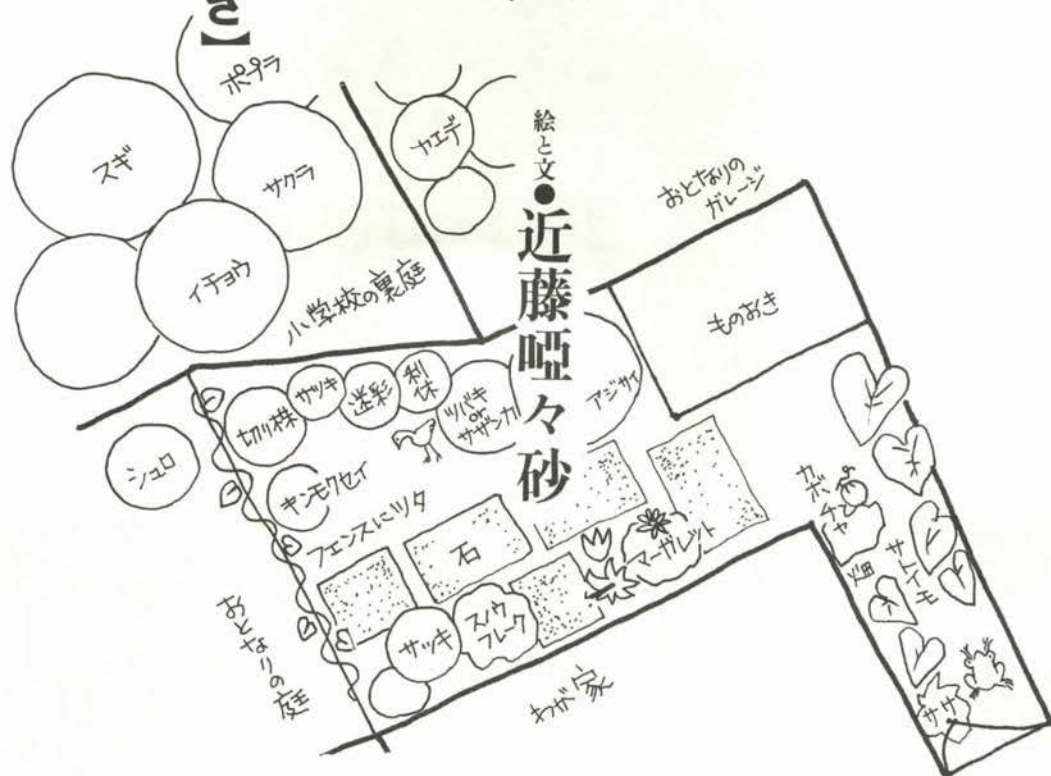
「極楽はあるか」の素朴な疑問も同様に「ああ、つまらないことを考えていたんだなあ」と、微笑みのうちに払拭されるのでしょうか。こうした質問とそれに対する上人の答えは見出せなくとも、上人のご法語に残されたお言葉に触れてると、そう思われてなりません。「まあ、楽しみに待っていないさい」

上人のお答えを、こう憶測しては失礼でしょうか。（小村 正幸）

つぼ庭日記

【はじめに庭ありき】

絵と文・近藤啞々砂



メイサイ君がニセアカシアらしいと解かったのは、もうここに越して半年近くも経ってからのことだった。マメ科特有の羽状複葉でアカシアの葉は偶数、ニセの方は奇数と本に書いてある。

この借家に引越してきたのは、一月の中旬だったが、小さい庭には前の住人とそのまた前の住人が植えていった木が雑多に並んで、素人目にも乱暴に剪定されてあった。サツキとサザンカは低い玉仕立てになっていたが、あとの木は鉋でぶった切ったかという形で立ち枯れていた。葉をつけている木は少なく、その木肌から名前を探ることはできなかった。しかたなくその容姿から「利休」「迷彩君」「切り株ちゃん」とあだ名をつけた。

玄関脇から庭に続く通路の両脇に細長く畑の跡があり、堀りかえすと何かの根っこがズルズルと出て、その下に炭が埋めてあった。もう一方には、長ねぎが三本とミイラ化したシソが植えたままになっている。

まだ雑草の少ない冬の土から錆びついた肥後^ごの守が出て、刑事の気分を味わったが押収するに至らず、気弱に埋めもどしたりもした。全てが謎解きである。

そんなある日、激しい呼鈴にドアを開けるとグアム島の横井さんが背広を着て年を取った風の、見知らぬ老人が立っていた。「ワタシ、ナカガワ言いますけど、以前ここに住んどったんですわ」と言ったあと、ウチの職業や家族構成を聞いた。夫は勤め人だと言っておいたが、まだ何か聞いたそうなのを「畑を作ってらしたんですね」と質問で蓋をした。老人は「ええ作ってましたトマトナスピーマンは連作はできませんけどニンジンサツマイモネギはわりあい簡単ですがカボチャがウドンコ病にやられましてな難儀しましたですわ」と時速一二〇kmで一気に喋り上げた。

庭木の名前を聞きたい気がしたがやめておいた。そして老人は、庭側のサツシの鍵が甘いこと、近所の奥さん方と仲良くした方がい

い、などと告げ「もう来ないと思いますけどナカガワ言います」と念を押して帰っていった。結局、前の住人が中川という老人だったということが解かっただけで、知りたいことは何ひとつ解からなかった。それにしても、「もう来ないと思う」ということは「また来るかも知れない」ということなのだろうか。

二階に上げるタンスなどをガタガタと庭に出し、引越屋がスニーカーで踏みつけていた花壇から、チューリップやスノーフレークがニョキニョキ出てきて、三月には満開になった。それからサツキが咲き、マーガレットの次にはアジサイが色を変えながら咲いた。アジサイの終る頃、グイグイと背をのびし、蕾をふくらませていたユリがカサブランカ系の大ぶりの花を咲かせた。とりあえず芽を出したものと図鑑や園芸の本とのにらめっこで肥料をやったり世話をするのだが、花が咲いても名前のわからぬものもあった。

まだまだ謎解きは始まったばかりである。



複製の白い鳥をツバキの花の下に置きました



息子が四歳になったのを機に親子三人、仕事場を兼ねたこの家に移った。六軒つづきの長屋だが、それぞれに小さな庭が付いており、フェンスで区切られているのが気に入った。

目の前は、小学校の裏庭でイチヨウやポプラごしに校舎が見える。仕事をしていると給食室から揚げ物の匂いが漂ってきたり、伴奏に合わせて歌う子どもたちの声や、鳥の声が聴こえる。

夫も『私』も俳句を始めてから、植物や身の回りの小さな出来事に無関心ではいられなくなった。

また、緑の多いこの家で暮せば、子どものぜんそくやアトピーが治り、いい俳句ができ、何もかもがうまくいくのでは、という藁をもつかむような期待があった。

『私』が手に入れた「借りものの小さな庭」と、それを取り巻く小さな出来事。

さて、お話は次回に続く。

京都一千年の歴史に

育まれた巧みの技

京仏壇・佛具は当店に!!

☎六二五 京都市右京区

西京極郡町一〇三番地三

(株)島津法衣佛具店

☎〇七五—三一四—七七六八

FAX 〇七五—三一五—三七五三

ポケット版

枕経通夜葬儀諸経偈文集

諸経偈集

こんな経本が
ほしかった

能化必携！

21世紀の経本遂に刊行！

プロが創った

緊急、不意の枕経に、お通夜に

能化のお通夜、葬儀のお焼香に

これさえあれば

出先からそのまま回れる。

3つのポイント

◆ポケット版という大きさ！

タテ15センチ、ヨコ8センチ、

厚さ1センチ

◆通夜、葬儀に必要な経文を、

最小限にすべて網羅！

◆経典は、すべて本字にて表記！

内容

廣懺悔

懺悔偈

初夜禮讃偈

佛説無量壽經數佛頌

佛説無量壽經四誓偈

佛説觀無量壽經真身觀文

回向文

佛説阿彌陀經

一枚起請文

一紙小消息

發願文

脇導師作法

廣懺悔訓読

定価：2,000円(税込)

送料	1冊	180円
	2冊	210円
	3～5冊	310円
	6～8冊	340円
	9～11冊	380円



◀お申し込み先▶

ふじゅせん刊行会

〒141-0021 東京都品川区上大崎1-9-11 〈戒法寺内〉

TEL：03-3441-8971 FAX：03-3441-8702

郵便振替00150-8-158563 ふじゅせん刊行会

FORUM
浄土の広場

「浄土の広場」では
読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウオッチング、紀行文、その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

〈特選〉子の歯型夫の歯型りんぐ剥く

石原 新

●りんごをむいて幾つかに割る。子が食べ夫が食べる。作者は多分その夫のほうで、むいている妻に、逆にそれとなく目をやっっているのである。妻に対する思いを、自分たちの歯型に託して示しているのだ。

〈佳作〉ほのぼのと林檎匂える仏の日

河合富美江

杓殻の記憶いつまで林檎箱

石削 一策

渋滞の助手席にいて林檎むく

山口 信子

〈特選〉島にまた空屋が一つ虫しぐれ

浜口 佳春

●離島の過疎化が深刻になって久しい。長男は残るが、娘たちは出て行ってしまいうから、嫁さがしは他の地でという矛盾もある。いま

選者=増田河郎子

〈特選〉

秋刀焼く七輪。ぼつり夕景色

四本 章江

また一軒が空き屋になった。虫しぐれは、そのやりきれなさを助長する。

〈佳作〉ちちろ鳴く無住寺にきよう兼務の僧

松田 光蒼

朝明けの風通りくる虫の宿

井村 善也

虫の声聞きゐて登餉忘れけり

大村 和代

●七輪は、この頃もう珍しいものになっている。この句は現実というよりは、過去を懐かしむような空気がある。それはそれで良い。消えて行つたかつての夕景色をしつかりと頭に浮かべればよからう。

〈佳作〉秋立ちぬ不善なすこと忘れおり

横山 正志

秋曇り友の白衣を借り勤む

富田 良子

川べりの稲架の匂いや朝釣りに

野村多加子

林檎

贈らるるりんご待つ一日の長きかな

母供養林檎好みしお仏前

大声で訛って通るりんご売り

林檎籠揺らして帰る長き橋

信濃路の夕陽の映えし林檎村

林檎剥く厚き薄きの皮の輪に

不揃いの林檎盛られし農の家

異国の地に友とかじりぬ青りんご

虫

大きな失いし日の虫しぐれ

風呂桶の陰に鳴きいる昼の虫

大寺の回廊ごとに虫すだく

ラジオ切る部屋に満ちたる虫しぐれ

山本美代子

大場清

増田信子

河合富美江

井村善也

新庄成美

浜口佳春

中村陽子

山本美代子

中村よみ子

大場清

村上青女

人の死に急ぐ伊勢路の虫しぐれ

蟲の音や濡れて細身の飛鳥仏

松虫が夜道の足を止めさせる

我を通す孫を叱るや虫の闇

売れ残る分譲宅地に鳴くちちろ

ベン止めてしばし聞きいる虫の声

城山に街の音なく虫の声

原稿の遅々と追まらず虫しぐれ

草叢やひねもす漏るる虫の声

参道の一灯更けて残る虫

虫時雨能狂言のおんな声

夕まぐれ庭のあちこち虫の声

自由題

天高く佳きことに又会いし余生かな

一株の芒の門をくぐりけり

そよぎいる稲穂の彼方沖明り

くねくねと水路の真紅曼珠沙華

灰皿に吸殻ひとつ糺祭忌

秋立ちぬ厩にしるす旅予定

宇治橋をくぐりて消えし秋の蝶

百舌鳥の啼く樗の梢ゆらしつつ

秋蝶や赤い頭巾の大地蔵

過疎すむ子猫の多き島となり

味噌蔵の甕のしめりや秋の風

垣根越し手盆でもらう茗荷の子

奪われし会話ひととき蟬時雨

増田信子

河合富美江

山口信子

石原 信

松田光誉

加藤政男

三ツ橋仁平

池田伊織

小林惠美

島谷ときを

堤ふみ子

中村陽子

山本美代子

河合富美江

池田伊織

中島一子

松田光誉

中村陽子

瀬川浩子

金子節子

加藤政男

浜口佳春

増田信子

小久保あきを

村上青女

第十一回
浄土誌上句会の
お知らせ

季題

短日

大根

自由題

締切・十一月二十日
発表・『浄土』一月号
選者・増田河郎子(『南風』主宰)
応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各一名・佳作各三名

●葉書に俳句(何句でも可)と、住所氏名を必ずお書き下

さい。

宛先

〒105-0001 東京都港区芝公園4-7-14 明照会館内

月刊『浄土』誌上句会係

☆まちがいは7ヶ所あります。

「芸術の秋モデルは青首だよ」



イラスト 藤井ひろし



まちがいがし

答えは35ページにあります。

編集後記

数々の器に月をながめいる

岱潤

一九〇三(明治三十六)年、大阪で第五回勸業博覧会が開かれ、学術人類館という見せ物小屋ができ、檻の中に琉球人、朝鮮人、台湾先住民(高砂族)、アイヌ人を入れ、それぞれ民族衣装を着させて陳列した、いわゆる「人類館事件」が起きました。

このかんがえられないほどの民族差別事件に対し、このとき沖繩で激しい抗議行動が起きました。しかし悲しいことはその声明の中で沖繩の人が、「我々を彼等と一緒にするな」とあったことでした。このことは今でも沖繩の人を苦しめ、深い反省の中で民族を見

つめる深い目を育てています。

差別を受けたものが差別をする側に回ってしまうこと、このことは大変悲しい事実です。しかしこのことによって、差別を行った本土の人が誰一人忘れているようなこの事件を、沖繩の多くの人が語り継ぎ、自らの懺悔とともに語られる言葉には、大きな重みがあります。

天高くたつたひとつの月も、足元を見ればたぐさんのそれぞれ形の違う器に映り輝いています。そのことによって救われることを知っているのは、我々法然門下生のはずです。(長)

編集スタッフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
村田洋一
佐山哲郎
間川彰道

編集顧問

大室了暗

浄土

六十五巻十月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷——平成十一年十月二十五日

発行——平成十一年十一月一日

発行人——真野龍海

編集人——宮林昭彦

印刷所——株式会社 シー・アイ・イー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四一七一四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三(二五七八)六九四七

FAX〇三(二五七八)七〇三六

振替〇〇一八〇一八二一八七



道路工事中



消火器



歩行者横断禁止



火気厳禁



止まれ



雷注意



民家近し、静かに



足元注意

住友海上

代理店



踏切あり



非常口



火 種

安心と安全をお届けするのは、
このマークです。



さわるな



破れ物注意



安全第一



学童注意



取り扱い注意

ここにあるマークの意味、わかりますか？暮らしの中には、注意を呼びかけるマークが、ほんと、たくさんあるんですね。生活のいろんな場面で、みんなが注意し合って、ルールを守っている。だからこそ、私たちは毎日を穏やかに、安らかに過ごせます。でも、万が一のときのために、覚えておいて頂きたいマークがあります。それは、あなたに安心と安全をお届けする、このマークです。保険のことは、あなたの街にある住友海上代理店へ。

安 心 と 安 全 を お 届 け す る



住友海上

〒104-8252 東京都中央区新川2-27-2 TEL:03-3297-1111(大代表)

浄土特選頒布会

ご注文・お問い合わせは法然
上人讃仰会まで。

【水晶数珠】

電話：03-3759-7074

FAX：03-3759-6323

【布教額・選択集十六章之図】

電話：03-3578-6947

FAX：03-3578-7036

肌身はなさず、
仏さまの御加護を

水晶 数珠

水晶腕念珠

水晶腕念珠 ① 6ミリ珠・M(16センチ)2,200円
② 6ミリ珠・L(18センチ)2,500円

水晶数珠 プレスレッド ③ 6ミリ珠・M(16センチ)2,200円
④ 6ミリ珠・L(18センチ)2,500円
⑤ 8ミリ珠・M(16センチ)2,700円
⑥ 8ミリ珠・L(18センチ)3,000円

- ・ 申し込からお届までおよそ3週間です。
- ・ 送料は一個口あたり300円です。また別途消費税がかかります。
- ・ 支払いは商品のお届時の代金引き替えです。
- ・ 商品の品質に関しては万全を期しておりますが、配送時の事故、不良品、誤配送などについては送料当方負担でお取り替えいたします。

水晶数珠プレスレッド



仏壇用宗旨布教額

家庭の仏壇にぴったりの布教額です

大(320×183ミリ)

1,260円(送料別)

小(273×142ミリ)

480円(送料別)

平成11年6月より頒布価格が変わりました

選択集十六章之図

選択本願念仏集を絵で解きました

豪華額装入り(585×465ミリ)
20,000円(税・送料別)解説書入り
(お届まで4週間かかります)

